

[論文]

女子短大生の子ども観と子どもの行動に対する認知の関連

The Relationship between the Female College Students' Perception
towards Children and their Cognition of Children's Behavior

藤 田 文

Fujita Aya

大分県立芸術文化短期大学

研究紀要 第54巻

2017年3月

[論 文]

女子短大生の子ども観と子どもの行動に対する認知の関連

The Relationship between the Female College Students' Perception
towards Children and their Cognition of Children's Behavior

藤 田 文

Fujita Aya

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship between the female college students' perception towards preschool children and their cognition of children's behavior. Female college students responded to a questionnaire asking about the perception towards children and the cognition of children's misbehavior. The scale of the cognition of children's misbehavior was consisted of three subscales; positive, negative and hostile attributions. The results showed that the negative and hostile attributions were higher in the students who have the negative image of children than in those who have the positive image of children. And the result about the positive attribution indicated that there were no difference between them. These results indicated that students' perception of children related with the cognition of children's misbehavior.

Key words :perception towards children, cognition of children's misbehavior, female college students, hostile attribution

【問題と目的】

大学生にとって、自分達と同世代の友人とだけでなく、子ども達のような世代の異なる様々な人々とコミュニケーションがとれることは重要な課題となる。世代間のコミュニケーションによって異なる視点の獲得が可能となり、複雑な社会への適応を促進すると考えられるからである。また、自分が親になる前の学生時代に、子どもとのコミュニケーションの経験をし、コミュニケーションをスムーズに行うためのスキルを身につけておくことは親準備性の観点からも意味があると考えられる。しかし近年、少子化などの社会的状況の影響もあり、青年期の大学生達が日常的に子どもと関わる機会が減少しつつある。子どもと関わる経験が少ないために、子どもに対して否定的なイメージを持っている学生もいる。また、子どもを目の前にしても、どのように接してよいのか不安である、どういった言葉をかければよいかわからないというように子どもとのコミュニケーションに自信がない学生も少なからずいる。

従来、このような大学生の子ども観や子どもと関わることに対する効力感の違いによっ

て、大学生と子どものコミュニケーションにどのような違いがみられるかについて研究されてきている（藤田, 1999, 2000, 2002, 2004）。これらの研究では、まず、学生の子ども観や子どもとのコミュニケーションに関する効力感を測定する。それにより学生を、肯定的子ども観と否定的子ども観を持つ学生、また高い効力感を持つ学生と低い効力感を持つ学生に分類して、実際の子どもとのコミュニケーションを比較して、その違いを明らかにしようとしている。

藤田（2000）では、肯定的子ども観を持つ学生と否定的子ども観を持つ学生の子どもとの会話を録音し、大学生の発話量と発話の種類（復唱、応答、質問、誘いかけなど）に焦点をあてて検討した。その結果、肯定的子ども観を持つ学生のコミュニケーションの特徴として、子どもとの発話量が全体的に多く、「誘いかけ」「復唱」等の発話を多く行い応答性の高い会話を行っていることが示された。質問の種類は、子どもの自由な発言を可能にする「開かれた質問」が多く、子どもの会話を引き出していることが示された。一方、否定的子ども観を持つ学生のコミュニケーションの特徴としては、子どもとの発話量が少なく、質問の種類は、「はい」や「いいえ」で答えられる「閉ざされた質問」が多く、会話が展開しにくいことが示された。

また、藤田（2002）では、子どもと関わることに対する効力感が高い学生と低い学生が子どもと遊ぶ際、どのように子どもとコミュニケーションをとるのかを比較検討した。この研究では、子どもとの会話の中で大学生が話題を変えて話の流れが途切れた部分、子どもとの会話の流れを考慮しない大人としての発言、会話の文脈とは離れた唐突な質問など、子どもとの会話の流れに焦点をあてて検討した。その結果、効力感が高い学生は、会話の途切れや唐突な質問が少なく、子どもがその時に行っている遊びに関連したような質問をしたり、子どもの興味関心を満たすような話題を選択しているが、効力感が低い学生は、その時の子どもの遊び内容には無関係な唐突な質問をしたり、会話の途切れが多いことが示された。

このように、従来の研究で、子ども観や子どもと関わることへの効力感によってコミュニケーションのとり方に様々な違いがあることが明らかになった。こういったコミュニケーションスキルを身につければ子ども嫌いや苦手な人も子どもとうまくコミュニケーションがとれる可能性も高まると考えられる。その一方で、そもそも子ども観や効力感、どのような経験や特性と関連しているかについても検討されてきた。

従来の研究（藤田, 2004）では、子どもと関わる効力感ときょうだい構成と子どもと接した経験の関連が検討されている。この研究では、年下のきょうだいがいる人は、年下の人とのコミュニケーションを取る機会が多いため、子どもと関わることに対して慣れが生じて効力感が高いのではないかと考え、きょうだい関係を比較した。その結果、自分より年下のきょうだいがいるかどうかという点と効力感の程度との関連はみられないことが示された。また、効力感高群と低群でこれまでに子どもと接した経験の量を比較した。その結果、効力感高群は低群よりも経験得点が有意に高く、子どもと接した経験が多いことが示された。従って、きょうだいとの経験というよりは、様々な実習や近所の子どもたち、親戚の子どもたちと接した経験が効力感と関連していることが明らかになった。効力感が低い学生は特に自信をなくすような経験をしているというよりは、経験の量が少ないことか

ら自信が持てないでいることが示唆された。

さらに藤田 (2008) では、子ども観による情動的共感性の違いが検討されている。子どもは一般的に大人よりも感情が大きく表現される。従って、子どもと関わる際には子どもと一緒に遊びの楽しさや面白さを共感したり、一緒に様々な感情を味わったりすることが重要なのではないかと考えられる。これは、Stotland (1969) によって定義された「他人が情動状態を経験しているか、または経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」つまり情動的共感性といえる。このような観点からこの研究では、これを日本語版にした加藤・高木 (1980) による情動的共感性尺度を用いて、子ども観による違いを分析した。その結果、肯定的子ども観を持つ人は否定的子ども観を持つ人に比べて情動的共感性の中の暖かさが高いことが明らかになった。実際に子どもと関わる場面でも、肯定的子ども観を持つ人は、子どもとの楽しかったエピソードを多く記述しており、感情的な表現の記述も多かった。

以上のように従来の研究から、子ども観や子どもと関わる効力感によるコミュニケーションスキル、きょうだい構成、子どもと接した経験量、情動的共感性の違いが示されてきた。否定的子ども観を持つ人は、子どもと関わる経験が少ないために、コミュニケーションスキルを獲得することができず、ますます苦手意識を持ってしまう可能性がある。つまり、コミュニケーションをとる前から子どもの行動に対する認知が否定的である可能性もあるだろう。特に、子どもの機嫌が良い状況よりも子どもが反抗的な行動を示した状況の方が捉え方に違いがみられるのではないかと考えられる。

従来の育児における虐待傾向の研究 (中谷・中谷, 2006a) では、3, 4歳の子どもの持つ母親を対象とした調査を行い、母親の認知的枠組みが虐待的行為にどのように影響するかについて検討された。この研究では、子どもの行動に対する認知尺度の因子分析結果から、3~4歳児の反抗的行動に対する母親の認知には、「子どもの悪意を感じる」「子どもにバカにされた気がする」など、行動の背後に敵意を感じたり、自分を否定する行為であると被害的に捉える側面、「戸惑いを感じる」「つらく感じる」など、困惑したり否定的に捉える側面、「子どもが成長している証拠だと受け止める」「子どもらしいと思う」など、成長過程において必要な行動であると肯定的に捉える側面の3つの側面があることが明らかにされた。

これらの認知的枠組みの中で、被害的認知および否定的認知に対しては、育児ストレスが促進要因として、自尊感情の強さが抑制要因として影響することが示された。さらに、母親の否定的認知は虐待的行為との有意な関係は見出されなかったが、被害的認知は虐待的行為と有意な関係が見出されている。つまり、虐待する母親は子どもに対して認知のゆがみを持っている可能性が示唆される。これと同様に大学生においても、肯定的子ども観を持つ人と否定的子ども観を持つ人では、子どもの行動に対する認知が異なっているのではないかと考えられる。

また、Dodge (1986) による攻撃性に関する研究でも、攻撃的な子どもは、相手の行動の意図が不明確な場面において敵意があると認知する敵意帰属傾向が高いことが示されている。このような敵意帰属と攻撃性の関係は成人においても見られることが明らかにされている (久木山, 2003)。このことから、敵意帰属のような相手の行動に対する認知は検討す

べき重要な側面であると考えられる。

従って本研究では、大学生における肯定的子ども観を持つ人と否定的子ども観を持つ人の子どもの反抗的行動に対する認知の違いについて検討することを第一の目的とする。

次に、肯定的子ども観を持つ人と否定的子ども観を持つ人の性格特性の違いについて検討する。前述の藤田(2008)の研究では、情動的共感性に違いがあることが明らかになっている。肯定的子ども観を持つ人は情動的共感性の中の感情的温かさが高いことが示されている。情動的共感性は他者に対しての性格特性である。確かに他者の感情に温かく共感する特性が、感情を表現する子どもとのコミュニケーションにおいてはうまくいく要素であるだろう。その一方で子どもが好きだと思う子ども観に関わる性格特性は、子どもと関わる大人本人も無理をせずに子どもと関わるができることが必要だと考えられる。また子どもと関わる際は、子どもを守ったり指導したり大人からの側面も重要であるが、子どもと対等な視点を持って一緒に遊びを楽しむという側面も重要だと考えられる。このことから肯定的子ども観を持つ人の方が否定的子ども観を持つ人に比べて、大人になってからも無邪気傾向が強く、ふざけたり明るくふるまったりする特性を持っており、子どもと関わりやすい可能性があるのではないかと考えられる。従って本研究では、肯定的子ども観を持つ人と否定的子ども観を持つ人の無邪気傾向の違いについて検討することを第二の目的とする。

【方 法】

対象者：本研究の対象者は、短期大学1年生の女性101名だった。

手続き：「心理学概論」の授業時間に集団で一斉に質問紙調査を行った。質問紙の内容は以下の通りだった。

第1は、子ども観に関する質問だった。4～6歳の子どもを思い浮かべてもらい、その年齢の子どもについてどのようなイメージを持っているか、表1の10項目に関して自分に当てはまる程度を、全く思わないから大変思うまでの5段階で評定してもらった。

第2は、無邪気傾向に関する質問だった。対象者の無邪気傾向を測定するために、表2にある6項目を作成した。大学生生活の状況を考慮に入れて、はしゃいだり感情を派手に表現したりなど、子どもっぽいと考えられる行動を設定した。表2の6項目に関して今の自分に当てはまる程度を、全く当てはまらないから非常によく当てはまるまでの6段階で評定してもらった。

表1 子ども観質問項目

1	想像力を持っている
2	自己中心的な行動をする
3	大人をよく見ている
4	自己主張が強い
5	かわいい
6	わがままである
7	豊かな個性をもっている
8	騒がしい
9	無限の可能性を持っている
10	生意気である

表2 無邪気傾向質問項目

-
- 1 ふざけて変顔することが多い
 - 2 写真にうつる時、ピースなどのポーズをとることが多い
 - 3 今でもブランコ等の遊具で遊べば楽しめると思う
 - 4 ダジャレを言ったり、しりとりをしたり言葉遊びが好き
 - 5 「やったー！」と言ったり、ガッツポーズをしたり喜びの表現が派手
 - 6 メールやラインでは、絵文字顔文字、スタンプなどをよく飾るほうだ
-

第3は、子どもの行動に対する認知に関する質問だった。ストーリーと質問項目は、中谷・中谷(2006a)を参考に作成した。この研究では、子どもの反抗的な行動に関するストーリーを設定し、それに対する母親の認知について検討していた。提示するストーリーは2種類あった。この研究では、母親を対象にしたストーリーで、食事場面と買い物場面が設定されていた。食事場面については母親が作った食事を子どもが食べようとしない場面であり、学生にはやや想像しにくい場面であると考えられる。従って、育児の経験がない大学生の対象者向けに変更して、子どもがなかなかおもちゃを片づけずに反抗する片づけ場面を設定した。この片づけ場面と従来の研究と同様の買い物の途中でお菓子を買ってほしいと駄々をこねる買い物場面の2場面を本研究のストーリーとした。具体的なストーリーの内容を表3と4に示した。

このストーリーを対象者に読んでもらい、それぞれの場面で子どもの行動に対してどのように捉えるかについて質問した。質問項目は、中谷・中谷(2006b)で用いられていた「被害的認知」と「否定的認知」と「肯定的認知」の尺度を採用した。学生には判断しにくいと考えられる育て方や親に関する項目は除外して採用した。被害的認知「子どもの悪意を感じる」など8項目、否定的認知「どうしてよいかわからず困ってしまう」など5項目、肯定的認知「子どもにとって必要なことだと感じる」など7項目、計20項目を設定した(表5参照)。3種類の質問項目の提示順序はランダムとした。それぞれのストーリーでこの20項目に関して自分の気持ちに当てはまる程度を、全然当てはまらないから非常によく当てはまるまでの5段階で評定してもらった。

表3 片づけ場面のストーリー

あなたは今、4歳の子どもと一緒に遊んでいます。あなたが「おもちゃを片づけよう」と声をかけても、その子は言うことを聞かず、口応えをします。もしあなたなら、このような子どもの行動に対してどのように感じますか。

表4 買い物場面のストーリー

あなたは今、4歳の子どもと一緒に買い物に来ています。買い物の途中、子どもが「おかしがほしい」とわがまを言って駄々をこね、泣き出しました。どんなに機嫌をとっても一向に応じず、いつまでたっても泣き止みません。もしあなたなら、このような子どもの行動に対してどのように感じますか。

表5 子どもの行動に対する認知尺度

被害的認知	否定的認知	肯定的認知
自分を否定されているように感じる	戸惑いを感じる	成長の過程で当たり前の行動だと思う
子どもに無視されたように感じる	子どもにどう関わればよいか悩む	仕方のないことだと感じる
子どもにバカにされた気がする	どうしてよいかわからず困ってしまう	子どもらしいと思う
子どもの悪意を感じる	子どもの胸の内がわからず不安に感	子どもにとって必要なことだと思う
子どもに裏切られたように感じる	じる	子どもが成長している証拠だと受け止
子どもがわざと自分を困らせている	つらく感じる	める
ように感じる		親から離れ、大人になっていくのだと
子どもが自分に心を閉ざしているよ		感じる
うに感じる		子どもの成長にとって避けられないこ
子どもの意図的な行為だと感じる		とだと思う

【結果】

(1) 子ども観による子どもの反抗的行動に対する認知の違い

子ども観による子どもの反抗的行動に対する認知の違いを検討するために、子ども観質問項目の分析を行った。子ども観質問10項目の合計点を算出した。対象者の平均点よりも高い人を肯定的子ども観群、平均点よりも低い人を否定的子ども観群として分類した。平均点は32.3点だった。分類の結果、肯定的子ども観群は49名、否定的子ども観群は52名になった。

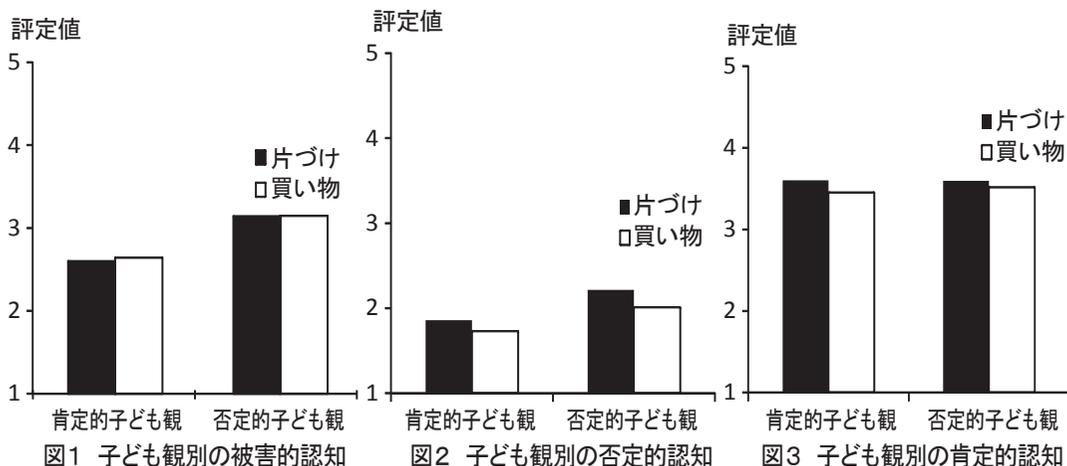
子どもの反抗的行動に対する認知は、被害的認知と否定的認知と肯定的認知のそれぞれで分析を行った。まず、被害的認知8項目の平均点をストーリー別に算出した。群ごとの平均点を図1に示した。このデータに基づき2子ども観（肯定的子ども観群・否定的子ども観群）×2ストーリー（片づけ場面・買い物場面）の2要因の分散分析を行った。その結果、子ども観の主効果が有意だった ($F(1, 99) = 8.71, p < .005$)。つまり否定的子ども観群の方が、肯定的子ども観群よりも被害的認知が有意に高いことが示された。

次に、否定的認知5項目の平均点をストーリー別に算出した。群ごとの平均点を図2に示した。このデータに基づき2子ども観（肯定的子ども観群・否定的子ども観群）×2ストーリー（片づけ場面・買い物場面）の2要因の分散分析を行った。その結果、子ども観の主効果が有意だった ($F(1, 99) = 5.28, p < .05$)。つまり否定的子ども観群の方が、肯定的子ども観群よりも否定的認知が有意に高いことが示された。また、ストーリーの主効果も有意だった ($F(1, 99) = 12.57, p < .001$)。つまり片づけ場面の方が買い物場面よりも否定的認知が有意に高いことが示された。

最後に、肯定的認知7項目の平均点をストーリー別に算出した。群ごとの平均点を図3に示した。このデータに基づき2子ども観（肯定的子ども観群・否定的子ども観群）×2ストーリー（片づけ場面・買い物場面）の2要因の分散分析を行った。その結果、ストーリーの主効果が有意だった ($F(1, 99) = 5.63, p < .05$)。つまり片づけ場面の方が買い物場面よりも肯定的認知が有意に高いことが示された。しかし、子ども観群の主効果は見られなかった。

以上のことから、子ども観によって肯定的認知には違いはみられず、図1から図3に示

されているように、両群とも評定値は肯定的認知が最も高いことが示された。しかし、否定的子ども観群は、肯定的子ども観群に比べて被害的認知と否定的認知が高いことが明らかになった。



(2) 子ども観による無邪気傾向の違い

子ども観による無邪気傾向の違いを検査するために、無邪気傾向6項目の合計点を算出した。肯定的子ども観群の平均点は26.8点(標準偏差4.78)で否定的子ども観群の平均点は25.2点(標準偏差5.71)だった。この平均点についてt検定を行った結果、有意差は見られなかった。つまり、肯定的子ども観群の方が否定的子ども観群よりもやや無邪気傾向が高いものの、有意な違いはないことが明らかになった。

【考 察】

本研究では、大学生における肯定的子ども観を持つ人と否定的子ども観を持つ人の子どもの反抗的行動に対する認知の違いについて検討することを第一の目的としていた。

大学生が想定しやすい2つのストーリーを設定して、子どもの反抗的行動に対する認知を被害的認知、否定的認知、肯定的認知の3側面から比較検討した。その結果、否定的子ども観群は肯定的子ども観群に比べて、被害的認知と否定的認知が高いことが明らかになった。このことから、否定的子ども観をもっている大学生の方が、「子どもの悪意を感じる」「戸惑いを感じる」など、子どもの反抗的行動の背後に敵意を感じたり、自分を否定する行為だと捉えてしまったりして、子どもの反抗的行動を自分自身が被害を受けていると認知してしまうことが示された。

否定的子ども観を持っている人は、子どもに対する「うるさい」や「生意気」という否定的なイメージをもともと持っていることから、子どもの反抗的な行動に対しても否定的・被害的認知を持ってしまうようである。否定的子ども観から子どもと関わる経験も少なくなり、それに伴って、子どもの発達過程への理解が乏しくなってしまう、子どもと接

し、わがままを言われたり泣かれたりした場合に、自信のなさから自分が責められているように感じてしまうのではないかと考えられる。被害的認知や否定的認知の高まりによって、ますます子どもを嫌いになってしまうとう悪循環につながることも考えられる。

肯定的認知に関しては子ども観群で違いは見られず、両群とも評定値は肯定的認知が被害的認知や否定的認知よりも高かったので、否定的子ども観を持っている人が子どもに対して異常に高く被害的認知をしてしまうというわけではない。あくまで肯定的子ども観を持っている人と比較すると、否定的子ども観を持っている人が被害的認知や否定的認知をしやすいということである。しかし、否定的子ども観を持つ人が被害的認知をしやすいという結果は、従来の母親の虐待傾向に関する研究(中谷ら, 2006a)と同様に、子どもの行動に対する認知が子どもとのコミュニケーションに重要な影響を及ぼしていることを示唆しているといえよう。

本研究では大学生を対象にしているので、被害的認知が将来の虐待の関係に結びつくとは限らないが、何らかのストレス要因が加わる状況になればそのリスクと結びつく可能性はあるだろう。被害的認知が虐待傾向と結びつくことから、認知行動療法のような母親の認知に直接アプローチする介入の有効性が示唆されている。従って、否定的子ども観を持つ大学生に認知の歪みが見られるという点に関しても、子どもの行動に対する知識や経験を増やすことでその歪みが解消される可能性もあるということである。親準備性という観点から、大学生の認知に直接アプローチすることも必要になってくるだろう。

また、子ども観に関わらず、子どもの行動に対する認知がストーリーで異なっていた。子どもが買い物でお菓子がほしいと駄々をこねて泣きだす場面よりも、おもちゃの片づけの指示に対して口応えをする場面の方が、否定的認知も肯定的認知も高いことが明らかになった。買い物場面よりも片づけ場面の方が、子どもなので仕方ないと考え、口答えも成長の一つだと理解できるが、実際にはどうしてよいか対処に困ってしまう度合いが大きいということである。片づけ場面の方が、大学生にとっても身近であり想像しやすかったのかもしれない。否定的認知は実際の対処の仕方も含めた質問になっているので、対処に関しては場面によって認知が変わってくることも考えられる。いずれにしても、子ども観に関わらず場面によって子どもの行動に対する認知が違う側面があることが明らかになった。今後、対象者が学生だったためにこのような結果が出たのか、それとも場面によって子どもの行動についての認知が異なってくるのかということについて、場面の種類を増やすなどして検討をする必要があるだろう。

一方で、被害的認知だけは、場面による違いがみられなかった。この点にも意味があると考えられる。従来の研究でも母親の虐待傾向と関連があるのは被害的認知だけであった(中谷ら, 2006a)。否定的認知は場面によっても異なっており、一般的に子どもと関わる場合の捉え方で誰にでも同様に生じるものであるが、被害的認知は場面によって違いはみられず、子どもとの特殊なコミュニケーションと関連している可能性が高い。母子相互作用の中で、子どもは心的世界を有した存在であるとみなして心に焦点化して関わろうとするmind-mindednessの観点が重視されつつある(Meins, et.al, 2003; 篠原, 2006)。今後、心のある存在としての子どもの認知と子どもが自分を責める心を持っているという被害的認知との関係も考慮に入れて、子どもの心や意図をどのように認知していると子どもと関わり

やすくなるのかについて検討していく必要があるだろう。

本研究では、肯定的子ども観を持つ人と否定的子ども観を持つ人の無邪気傾向の違いについて検討することを第二の目的としていた。子どもが好きかどうかという子ども観は、本人が子どもっぽい無邪気傾向を持っているかという性格特性と関連があるのではないかと仮定していた。

しかし分析の結果、肯定的子ども観群と否定的子ども観群で無邪気傾向の違いがないことが明らかになった。肯定的子ども観を持っている人の方が否定的子ども観を持っている人に比べて、大人になってからも無邪気傾向を持っており、ふざけたり明るくふるまったりでき、子どもと関わりやすい可能性があるのではないかと予想されたが、無邪気傾向は関係がないことが示された。

従来の研究（藤田, 2008）で、肯定的子ども観群は、情動的共感性の感情的暖かさが高いことが示された。感情的暖かさは自己概念の「明朗性・友好性」と関連を持つので、遊びを通してのコミュニケーションが主となる子どもとの関係において、肯定的子ども観を持つ人は、活発な子どもの特性に共感しやすいことが示唆された。また、同様に「感情的暖かさ」は「独立性」とは正の相関を示すため、感情的暖かさが高いということは、独立意識が高く、精神的に安定し混乱のないことであることが示唆された。本研究で子ども観と無邪気傾向とは関連がなかったことから、情動的暖かさと子どもっぽい行動を取る無邪気さとは異なる側面であることが明らかになった。つまり、肯定的子ども観を持つ人の感情的暖かさは、子どもっぽいということではなく、独立した大人の側面を持った上での明朗性・友好性であることがより明確に示されたといえよう。従って、子どもとうまく関わるためには、本人が無邪気な特性を持っているというよりは、子どもに合わせて無邪気になれるかどうかといった独立した大人としての共感性の方が重要であることが示唆される。

この研究から、母親だけでなく学生でも、否定的子ども観を持っている人は被害的認知と否定的認知が高いということが示された。子どもと関わる際のスキルの改善と同時に、子どもの行動をどう捉えるかという認知を改善することも重要であることが示唆される。つまり、否定的子ども観を持つ人が子どもとうまく関わっていくためには、まず子どもの発達の過程や子どもの特性を理解した上で子どもの行動を捉える認知と共感性が必要ではないかと考えられる。

【引用文献】

- Dodge, K.A. (1986). Social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota Symposia on Child Psychology*, 77-125. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 藤田 文 (1999). 「幼児の観察実習」が女子短大生の子ども観におよぼす影響 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 37, 79-86.
- 藤田 文 (2000). 「幼児の観察実習」における短大生と幼児のコミュニケーション 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 38, 109-118.
- 藤田 文 (2002). 幼児と短大生の世代間コミュニケーション (V) —コミュニケーションの連続性— 九州心理学会第63回大会, 36.

- 藤田 文(2004). 子どものコミュニケーションに対する自信と子どもと接した経験との関連 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, 380.
- 藤田 文(2008). 女子短大生の子ども観と情動的共感性との関連 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 45, 81-90.
- 加藤 隆勝・高木 秀明(1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 久木山 健一(2003). 対人葛藤状況の親密性, 被害性と社会的情報処理の関連. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 50, 19-28.
- Meins,E.,Fernyhough,C., Wainaright,R., Clark-Carter,D., DasGupta,M., Fradley,E., & Tuckey,M.(2003).Pathways to understanding mind:Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*,74, 1194-1211.
- 中谷 奈美子・中谷 素之(2006a). 母親の被害的認知が虐待行為に及ぼす影響 発達心理学研究, 17, 2, 148-158.
- 中谷 奈美子・中谷 素之(2006b). 子どもの行動に対する認知尺度 心理測定尺度集VI, 225-233.
- 篠原 郁子(2006). 乳児を持つ母親のmind-mindednessの測定 心理学研究, 77, 244-252.
- Stotland,E.(1969). Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 4. New York:Academic Press. 271-314.